



2017年6月14日放送

印象に残る症例①

みさとファミリークリニック 院長 松田 正

症例は10歳の男児です。

8歳の時に、急性壊疽性虫垂炎で手術を受け一命は取り止めたものの、腹膜炎を併発したために、その後癒着性イレウスを繰り返し計3回の手術を受けています。大きな病院の外科に通院し、酸化マグネシウムとビオフェルミン製剤が処方されていましたが、お通じのコントロールがつかず、鈍い腹痛が持続して下痢と便秘を繰り返している状況が2年間ほど続いていました。

この患者さんが10年程前の12月に、開業して間もない当院へインフルエンザワクチンの接種希望で来院しました。接種前の問診を聴取している際に母親から、手術の既往と、その後も腸閉塞で何回も入退院を繰り返していること、体育の授業参加も禁止されていること、食事に気を遣い過ぎてご本人もご家族も疲れ切っているとの経緯をお聞きしました。実際、この患者さんを初めて拝見した時、身体はやせ細り目もうつろで全く元気がない状態で、持続性の鈍い腹痛が一番辛いと小さな声で訴えます。お腹を診察すると、手術の痕が多数ありお腹も凹んでいる痛々しい姿で、腹直筋の緊張も著明で腹皮拘急も認めました。

下剤と整腸剤の組み合わせ、私は使用したことはありませんが、実臨床では良く見かける処方です。自動車に例えるとアクセルとブレーキを同時に踏むような治療で、西洋薬だけでお腹を治療しようとするこのような処方になってしまうのだと思います。しかし残念ながら、食事や体調によって腸の状態も毎日変わりますから、当然薬の効果も日によって変化し、お通じの調整がより難しくなります。加えて、持続性の鈍い腹痛は、下剤によって常に

腸の粘膜が刺激されていることが原因だと考えられました。そこで、痛みを取りながら便通の調整が可能である漢方薬治療を当院で始めることになりました。

腹診からは小建中湯が第一選択薬と考えられましたが、腸閉塞を再発させるわけにはいかないため、下剤と整腸剤は中止し、まずは手術後の腸閉塞予防に頻用される大建中湯から開始しました。1週間後、「お通じの出は良くなって腹痛も減ってきた。」と来院されましたが、「ただ、ちょっとお腹が動き過ぎている感じがします。」とのこと。

腸管の蠕動運動が亢進しているにもかかわらず腹痛が改善しているのは、大建中湯の効果と下剤を中止した結果だと考えました。そして、大建中湯によって腸管の蠕動運動が亢進していると言うのは、まさに効きすぎているということなので、腸閉塞の再発を心配することなく、この日から小建中湯に変更しました。

驚くべきことに、小建中湯に変更したその翌日から、一番辛かった持続性の腹痛は完全に消失し、お通じも毎日順調に出るようになりました。

初診の時には、目に力がなく声にも張りがなかった患者さんですが、小建中湯開始 1 週間後の再診時には、本人は「とっても調子良いです。」と笑顔を見せるようになりました。母親は、「この 2 年間は何だったのだろう……でも本当に良かった。」と涙を流して喜んでおられました。

開業医をしていると、そうそう泣いて喜んでいただける経験は少ないものですが、お母さんの涙には二つの理由があったのではないかと私は推量しています。一つ目は、とても元気になったお子さんを見てホッとして安心したうれし涙、もう一つは、辛そうなお子さんをずっと見守りしかなかったお母さんの苦しみからの解放ではないかなと感じました。お子さんが元気になることで、お母さん、ひいてはご家族全員が元気になれるという好循環はしばしば経験します。一人を治すことでご家族全員を幸せにできるというのは、家庭医にとってちょっと嬉しい瞬間です。

それから 2 週間後の受診時も、「腹痛も全くないし、お腹が張ることもありません。お通じも順調です。」と淡々と話しながらも、とても調子が良さそうです。腹部所見も腹直筋の緊張が取れて、圧痛も認めません。経過順調なので 1 か月処方することにしました。

ところが 1 か月経過しても来院しないため、気になってこちらから電話して受診を促しました。受診して開口一番ご本人曰く、「前回受診日から 10 日目くらいで内服中止してもお腹の調子が良いので、それ以降、内服していませんでした。」とのことでした。

本来医師の指示なく薬を自己中断することはとても危険なことです。ただ、私のそれまでの数少ない経験則では、漢方薬は長期間内服しないと効果が長続きしないと思い込んでいましたから、今回のようにすぐに効果が出て、数週間で体質が変化して廃薬できるという事実直面して、逆にこちらが戸惑ったのを今でもはっきりと覚えています。廃薬後も調子が良いようなので、お通じの出方に少しでも変化があったらすぐに受診するようにと伝え、治療終了としました。

それにしても、2 年間文句も言わずに病院の薬は飲んでいたのに、著効した漢方薬をなぜ

急に止めてみようと思ったのか、その心理過程をととても不思議に思いました。きっと、よほど体調の良さに自信がついたのでしょう。病気と闘うことに疲れ果てていた元気がない少年が、漢方薬によって体質だけでなくメンタル面も好転する、心身一如を目の当たりにした思いでした。

その後は、身長、体重も一気に増えて、見違えるように元気になり、体育の授業にも参加できるようになりました。小建中湯の出番もその後は全くありません。今は元気過ぎて1〜2年に1回会う程度ですが、会うたびに背が伸び筋肉質な体格になっていくのを見て、あのやせ細った少年がこんなに立派な青年になって、と親でもないのに妙に感慨深くなります。

小建中湯は飲みやすく小児の様々な病態に使用されますが、単にお腹の薬というだけではなく、ストレス反応への改善効果も認め、「子どもの心に寄り添う薬」とも言われています。構成成分の半分が膠飴、あめ、でできていて、腸内細菌を調整してお腹から元気にすると言われていますが、急迫症にも多用され即効性もあるとても不思議な漢方薬です。

近年、海外や日本でも注目されている腸内常在菌ですが、神経、ホルモン、免疫レベルでの双方向性の腸脳相関によって、脳の発達や人間の行動にも関与することが指摘されています。まさに小建中湯はその調整役を担っているのではないかと私は推量しています。科学の最先端の腸内常在菌解析が小建中湯の薬効を紐解く日が近づいているのかもしれませんが。

実際に当院では、不登校に良くみられる朝の腹痛や頭痛に頻用しています。夜尿症治療は効果が出る症例と出ない症例がはっきり分かりますが、無効例であってもデスマプレシンとの併用は相乗効果があるので、やはり腸脳相関が示唆されます。

大人の過敏性腸症候群には桂枝加芍薬湯が有名ですが、私は少量を多く使用しますが小建中湯を選択することが多く、やはりメンタル面への作用が奏効しているのではないかと考えています。それが証拠に、何を使っても便秘が改善しない難治性便秘にも小建中湯が著効することがあり、精神的な緊張が便秘の原因であったことに気付かされることも多々あります。

その他に私が実践している使い方としては、感染症を繰り返すお子さんに使用して、感染症を予防したり、どこの病院に行っても治らなかった難治性頭痛が、1回内服ただけで治った症例もあります。これも、腸管内における免疫増強作用、あるいは腸脳相関で説明がつくかもしれません。良薬でありながら苦くなく甘くて飲みやすい、懐の深い漢方薬です。

今回の症例は、漢方初心者だった私に漢方薬の即効性と心身一如、そして体質改善によって薬を卒業できる、廃薬できることを最初に気付かされてくれた貴重な症例です。そのご縁もあって、お腹から元気にする薬、小建中湯は私の大好きな処方の一つです。